
トワイロのソラ

夢野欠片

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トウイロのソラ

【Zコード】

Z8078D

【作者名】

夢野欠片

【あらすじ】

今の状況を説明しよう。俺こと木崎英介は死亡している。そして俺は『勇者』たちの戦いに巻き込まれていく

プロローグ

始まりは

どこにでもありそうな噂。

平凡でありふれたとるに足らない噂。

曰く、自分の一番大切なものと引き換えに夢を叶えてくれるところの噂。

世界がゆっくりと暗転する。

今の状況を説明しよう。

今、俺こと木崎 英介の胸には石が突き刺さっている。
どうして、俺の胸に石が突き刺さっているかというと、

理由は簡単だ。

女の子を怪物から助けたのだ。

俺が勝手に石に当たられたような感じがしたけど、結果的には助けたんだしよしとするか。

でも、あの子は逃げてくれたんだろうか。

ああ、何でこんなことになつたんだろう。

俺は薄れゆく意識の中、今日一日のことを見出していくとした。

「よお木崎。」

学校での一日の始まりはこんなどうでもいものだったと思う。

俺に話しかけてきたのは猪狩 純いかり じゅんで俺と同じく高校一年生でサッカー部員だ。

「何か用?」

「ああ、少し雑談をな。」

雑談、という辺りどうせひくな内容ではあるまい。

「噂があつてな。一つはこの街にいる通り魔についてもつ一つは、まあありがちなヤツ。」

猪狩は、どつち聞きだい？と僕に少し顔をよせてくる。

俺は、どつちでもいいと応える。

「じゃあ、通り魔についてだ。」

俺をじつと見る猪狩。

「えーと、今日の欠席は。」

最近腹が心配だとぼやく担任教師は出席簿を開きながらあたりを見回す。

そして俺の後ろの席を見ると

「何だ。桐崎きりさきは今日も休みか」

と小さく呟いた。

桐崎、というのはうちのクラスの不登校児である。

フルネームは桐崎きりさき 十色といろ。

入学式から五月現在まで一回も学校に来ていないという、ある意味で名物的な人物なのだ。

先生も手を尽くしていろいろがどつこつわけか親に門前払いにされるらしい。

容姿はとりあえず髪が長かつた。

たぶん生まれてから髪を切らずに育てばあんな風になるのだろうと

桐崎十色と同じ中学校の生徒は語る。

たしか腰まで髪が伸びていたそうなのだ。

しかも髪を束ねていながら初めに写真で見たときは髪で顔が隠れ、ながら世界的に有名なテレビからあらわれる亡靈を思い出させるものだった。

そのくせ桐崎十色の髪は別に髪に気を配らない俺が見てもはつとさせられるほど見事な黒髪だった。

俺はさつきの猪狩の話を思い出す。

要するにあいつの話はこうだ。

まずは通り魔の話は超能力者の仕業だというのだ。

ここ最近、この街には物騒な話には困らなくなつていい。

簡単にいえば通り魔がいるのだこの街には。

2ヶ月くらい前に現れて以降、一週間に一回くらいのペースで人を襲っているらしい。

もう一つの噂はこの街のある場所に行くと願いが叶うという話だ。

その場所は四宮教会といつてこの町では一番の大きさを誇る。

明治の終わりに建てられたそうで、少し前に県の重要文化財にしようという話がでたらしい。

もつともその話はいつの間にか無くなってしまったようだが。

しかも今は誰も使っていない。

改めて猪狩の話を考えてみても思ひが

くだらないと

放課後。

することもないし、早めに帰ろう。

いや、猪狩の話のくだらなさを証明するためにも四宮教会によつてみよう。

そんな事を考えていると後ろから背中を叩かれた。

振り返ると後ろにはクラス委員長こと森岡 千夏もりおか ちなつが立つていた。

「木崎君。少しいい？」

この委員長こと森岡 千夏は我がクラスの委員長なのだ。

容姿は今時には珍しく、質素で地味なのだ。

しかも目立つほうでも勉強が出来るほうでもなく、それでも委員長になつてているのは、それなりの訳がある。

その理由は一言でいうと気が利くのだ。

それも心を読んでいるかのように。

そのお陰かその武勇伝を知つてた委員長と同じ中学校であろう女子生徒が森岡さんを委員長に推薦したのだ。

でもその委員長こと森岡さんがなにか用なんだらうか。

「何か用？森岡さん。」

すると森岡さんは少し言ごにくそうに

「その、もし暇だったらでいいんだけど?」

「?」

「少し仕事があるの生徒会の。ちょっと手伝ってくれると嬉しいかな。」

なるほどそういう事か。

森岡さんは不安そうに言つ。

「いいよ。俺も暇だし。それに。」

何気にこの委員長こと森岡さんは気が利いて今どきには珍しい質素さのおかげで男子からは人気があるのだ。

「それに?」

森岡さんは不安げに俺の顔を見つめてくる。

「あ、いや、何でもない。それより仕事つて何?」

「え、あー。うん図書室なんだけどね。本が散らかっているからそれの整理、お願いね。もちろん後で何か奢つてあげるから。」

しなくともいいのにA定食べぐらいならいけるかなー、とか財布を見ながらぶつぶつと呟いている。

図書室。

普段から使う人間も少ないので放課後ともなれば俺たち二人しかいない。

「これ、全部?」

うん、と気まずそうに森岡さんは頷く。

俺の前には空っぽの本棚そしてその隣にはうず高く本が積み上げられていた。

「やつと、終わった。」

ふらふらとおぼつかない足取りで帰り道を歩く。

と。

と。

キン。

四ノ富教会の前を通りつとした時。ひどく小さく妙な音がした気がする。

なにか金属音のような音がした。

辺りはもう暗い。なのに音がする、というのはおかしい。

立ち去るのも考えたけど、やはり気になる。

・・・危なくなつたら帰ればいい。それに入気のない場所で危険な
どあるはずがないのだ。

そう考え俺は教会へと走る。

教会への道はひどく静かなもののはず一

なのにかすかにあの金属音が聞こえてくる。

それも教会が近くなるほど少しづつ大きくなつていく。

いやな予感がする。

俺はいやな予感を振り払つために思い切り走る。

ほどなくして教会のドアの前に立つ。

全力疾走のおかげか鼓動が中からの音を遮断してくれている、いや

元からそんなのは最初からしないのか。

俺はゆっくりと重いドアを覗けるように少しだけ音のしないように押す。

すると中にいたのは。

二人の人間が対峙していた。

一人は長身瘦躯で全身をぴたりとした黒い服で覆つていて、背が
高いくせに男の手足はひどく細くまるで蛇のようだ。

その右手にはギラギラと光る一振りの日本刀。

そして、もう一人は。

俺の頭は真っ白になる。

そこには月光を反射し光る包丁を左手に持つたうちの学校の少女だ
つた。

少し小柄な背丈で腰まで伸びた髪。俺の高校の制服の上に裾の長い
黒コートを着ている。

変だおかしそうだ。

二人はじっと睨み合っている。

途中から入ってきた俺でも分かる。

だって少女は包丁なんか持ち出してるんだ。しかも男の方は日本刀である。

この二人の睨み合いに割って入れば、俺は間違なく殺される。ドアが開けられたことに対し二人は気づいていないのか誰もこちらを見ていない。

助かった。すぐに逃げるなり、警察にでも電話して俺は一步後ろに下がる。

ばかり。

なんとも間の悪いことに外に落ちていた枝を踏みつけてしまった。瞬間。

「誰だ！」

たぶん男だろう。でも顔を見る暇なんてない。

だって見る前に逃げ出していたのだから。

殺される。

そう頭が何度も思考する。

殺される、殺される、殺される。

それしか頭に浮かばない。

だから必死で走る。

だといふのに。

ザンッ。

「あつ・・・。」

右足に何か冷たいものが触れた気がした。

次の瞬間には地面に倒れこんでいた。

「はつ・・あ。」

ゆっくりと右足を見る。

制服のズボンからは、どす黒い血が滲み出していた。

理由は簡単、足のふくらはぎ辺りを斬られていたからだ。

それを見た瞬間、全身の血が凍る。

斬られた？

・・・そんなことありえていいはずがない。

だって、そんなのは犯罪だから。

なのに何で今、俺の目の前にいる男は刀を振り上げているんだ・・・？
それよりも俺より遅く走り出したはずだよな・・・？

男は感情もなく倒れた俺に話しかける。

「すまないな、このままじゃ色々と厄介なことにならうなんだな。

」
ふう、と小さく息を吐くと。

「じゃ、まあ死んでくれや。」

次の瞬間、男の腕が振り下ろされる。
声も出せない。

死ぬ？俺はここで？

いやだ。死にたくない。こんな一方的に死ぬのなんかごめんだ。
だといふのに水が蛇口から落ちるようにあっさりと刀が落ちてくる。
あと一秒もしないうちに下手をすれば俺は真っ二つになるだろ？
訪れる現実が恐ろしくて思わず目を瞑る。

金属音。

あ、確かに骨つて金属だっだけ。

いやでもおかしい。何の感覚もない。それにまづは肉を切る音がするはず。

俺はゆっくりと目を開ける。

そこには。

包丁で日本刀を受け止める、あの少女がいた。

男は不思議そうな声を出す。

「どうした、何故邪魔をする。」

すると彼女は大した事はしていないといつぱりひきりめていたてるだ

けっスよ。」

男は蛇が獲物を見定めるよつてじつとつと俺と少女を睨むと、小さくため息をつく。

「なるほどお前はそこの奴はお前が始末する、といつことだな。」

すると少女は男と切り結んだまま

「別に、この人は関係ないみたいですし、逃がそうと思いまして。ダメですかね。」

男は小さく笑うと切り結ぶのをやめて少女から後ろに文字通り飛びるように離れる。

その距離、約10m。

俺はぼんやりとその光景を見る。

すると男はゆっくりと刀を振り上げ

「はあ、お前バカか！？かんけーねから殺すんだろ！？」

何が起こるのか分からぬ。

俺はただ見るだけしか出来ない。

男はチロリと舌なめずりをすると

「ああ、分かったよ。お前、そこのガキと一緒に死ねよ。」

わけが分からなくて分かる殺される。だって男の武器は日本刀、それに対しても敵対しているらしく少女の武器はどこにある包丁だ。

戦力差は圧倒的だ。

何の合図もなく少女は疾走する。

だが男のように機敏さはなかつた。

少し同年代の少女の中では速い、といつてくらい。

その疾走を男が笑う。

少女と男の間は残り距離にして3m。

「馬鹿がつ。」

男は地面の石を拾う。

そして高く、上空へと放り投げる。

その数、全部で三つ。

「え。」

思わず声が漏れる。

突然、男の上空に投げた石が少女に向けて角度を変えて襲い掛かる。
おかしい。そんな馬鹿な。

普通、物体は重力に引かれるのが当たり前。
だというのに俺が見ている相手の投げた石は軌道を変えて少女に襲い掛かつた。

狙いは、一つは前進を阻むために前方に、二つ目は停滞を許さない
かのように今の少女の位置に、三つ目は敵の退路を阻むかのように
少女の後方に。

常人ならば回避など不可能な攻撃を少女は一歩、踏み出し敵の一つ
目の狙い通り前方に踏み出し

火花が闇に光る。

少女が包丁で石をはじき返した光だ。

「ちっ。」

男は舌打ちをする。

男は日本刀を下段に構えなおす。

「さすがに勇者。簡単には倒せんか。」

くつくつ、と愉快そうに笑うと。

「でもよお、嬢ちゃん。本気でそのガキを守りながら戦えると
も思つてんのか？」

「あー。」

そう言われて気づいた。

何で気づかなかつたんだろう。

少女がどれだけ強いかは分からない。

それでも俺を守っているという時点で少女は何らかの枷がつけられ
ているのには変わりはない。

なら俺は加勢でもすべきだわつ。
だが。

「無駄話をするよりも、もっと大切なことがあるんと思いまますけど
？」

くつくつく、と笑い続ける男はハイ？と頭の悪そうに言つと
ひゅん。

瞬間、男が話している隙にだろつ、少女は男の懷に忍び込んでいた。

男の右腕が切られた。

飛び散る鮮血。

それでも致命傷ではないのかでたらめに右腕の刀を振るう。

あっけなく少女は後退する。

男も慌てて後退する。

だがその後退も先程のように駄じみた勢いはなく、凡庸な人間が常識的に出しうる跳躍だった。

「つて、なんで能力が落ちてんだ！？」

その驚きは俺も同じだ。

一度しか見ていないとはいえ、男の数十秒前の跳躍は明らかに人間のものじゃなかつた。

なのに今は。

「あ、はあ。なるほどな、お前の力。それだけの能力があれば戦いの勝利者候補にもなるか。」

ゆつくりと男は少女を見据えると、

「お前の能力は、そうだな。敵の能力を押さえ込む、つてところか。

」

少女は答えない。

「だがよ。安心したぜ、嬢ちゃん自身は何も強くなつてゐてわけじゃなさそうだな。」

そう、男は腕を切られ、身体能力が落ちただけで体格が変わつたわけでもないし武器が壊れたわけでもない。

かたや少女は運動能力もただの人間とは変わらず武器もただの包丁だ。

状況は男のほうが有利だ。

あ、いや。男も少女も一つ忘れていることがある。

それは俺自身だ。

今、俺がこの場に出て行けば、男にとつても誤算になる。

ならー。

「せえいやー！」

気がつくと、男が少女を日本刀で攻撃を仕掛けていた。男は無論、体格だけで一方的に攻め続ける。

俺はゆっくりと立ち上がる。

「つぐ。」

足がひどく痛い。

それでも歩けないってほどじゃない。

それに少し我慢すれば走れるだろう。

走る。いつもの半分くらいの速度でしか走れないが、それでも十分

。 残り約二メートル。

どすん。

何か、胸を思いつきり押されたような感覚。

「ひあ？」

あれ？

何か胸に冷たい感覚。

飛び散るのは赤い液体。

血？

なん・・・で？

見れば俺の胸に少しばかり大きな石が入りこんでいた。

「！」へ・・・。」

思考回路がショートする。

ぼやける視界を凝らして見る。

見れば男の腕は俺の方向に向けられており俺の胸に世界がゆっくりと暗転する。

夢。

これは夢だ。

だってこんな場所なんて見たことがない。

目の前に見えるのは建物。

どんな建物か分からない。

だって燃え盛る炎に建物が焼かれているんだから。

そしてどうしてだろう、体がひどく いのは 。

「一つてあれ？」

辺りは暗い。

すぐ近くには四宮教会。

そして俺はベンチの上に寝ていた。

「あれ俺、昼寝でもしたのかな？」

ポケットから携帯電話を取り出す。

時刻は7時。

どうやら昼寝でもしたらしい。

「腹、減つたな」

立ち上がるをする。

「あつ。」

とたん胸に痛み。

刹那、妙な感覚に襲われる。

何故かそれが自分の体が欠けたような錯覚だった。

たぶんベンチなんかで寝てたからこうなったんだろう。

「あ、はあ。」

くらりと立ちくらみこしたもののかいした事はないみたいだ。

「くそ。微妙に制服に穴、開いてるし。」

どこかに引っかけたのか制服には穴が開いていた。

「どこに行つてたの、英介。心配してたんだよ。」

とコロッケを口にくわえながら、言葉とは裏腹にあんまり心配しないでいた女性が一人。

ピンクの可愛らしい牛がプリントされたエプロンに短く切った髪に女性としては背の高い170センチほどのスラリとしたモデル体型。この女性は木崎美奈きざきみなで父の歳の離れた妹だ。

歳も俺と12歳くらいしか違わないから親しみもこめて『美奈姉さん』と呼んでいる。

ちなみに職業は地元ではまあまあ有名な総菜屋をやっている。

「ごめん、美奈姉さん。なんか昼寝してたら、この時間になつててさ。」

いつも晩御飯には昼間に売れ残った惣菜が食卓に並ぶ。

「ふう。前から英介はジジくさいところがあつたなー、と思つてたけど昼寝までいくと重症だね。しかも制服もボロボロになつてし、よかつた。私がこの学校のOGで。」

む、今のは聞き捨てならん。いや、でもOGだからって男子の制服持つてるの変だと思うぞ。

「美奈姉さん。俺はしつかり若者です。大体コーラとか飲まないのは単に甘いのとか刺激物が嫌いなだけです。つていうかどこで男子の制服を仕入れてきたんだ。」

ぬうと膨れる美奈姉さん。

「つて言うわりに英介、最近の歌手とか芸能人にうといし。それにこの制服は憧れの先輩の卒業式の日に譲り受けたものです、そういうえば英介はこういう色恋沙汰とは疎遠ですなあ。」

痛いところ突かれた。

「そういうとこ、兄さんには似なかつたんだね。あの人、新しい物好きだつたし。あ、でも色恋沙汰に縁がないのは一緒か。」

…うちの両親はどこぞの研究室で働いていて、研究室が移動になつたとかで俺の行く高校が決まつてしまつた、その移動先に行つてしまつ

た。

その中で面倒をみると申し出てくれたのが美奈姉さんだ。
もっとも俺の両親は小さい頃から俺を一人にすること多かった。
そこでも美奈姉さんが面倒をみてくれたから今までとそう変わらないのだが。

「まあ、結論として最近物騒だし以後気をつけよ」に、せめて説教もこれくらいにして、今日のメインの牛カツです。」
……説教なのが今の。

朝。

野菜が入ったダンボールを店の中に置く。
さてこれで最後、すぐに朝飯だ。

美奈姉さんに起^ひこられて店の手伝いをする。

なぜかこれが美奈姉さんの『この家にいる義務』なのだそうだ。
なれば大した事はないしお陰で遅刻も免れることができるのだ。
と

「やつぱり日本人たるもの、お米だね。」

などと俺よりこの店の店主が食卓にて豪快に卵かけ^ご飯をかきこんでいた。

「店長殿？毎度毎度、従業員より先に^ご飯を食べるのはどうかと思^{います}が。」

卵をゴトンと置くと。

「うーでもお腹すいてたら何も出来ないでしょ？腹が減つては戦は出来ぬ、みたいな？」

つて、あれ？何やら毎度おなじみだけど魚のオーラみたいな？」

美奈姉さんを一喝した後一気に卵かけ^ご飯をかきこみ学校へと向かつた。

が何だろ？いつもの教室がどことなくぎこちないものに感じる。
とりあえず席につこうとするが、

猪狩が俺に小声で話しかけてきた。

「おい、見ろよ木崎。」

と顎で示した先には

俺の後ろの席に髪の毛のお化けが座っていた。

「なあ木崎。あれ桐崎十色だよな。」

あ、そうか。あれが桐崎か、あまりにも髪の毛が長いからこの世のモノではないみたいに見えたが、なるほど。

「なあ、なんで急に学校にアイツ来てんだよ？」

知るか。

始業のチャイムが鳴る。

「えへ、桐崎は長らく家庭の事情でお休みだったが今日これるようになつた。みんな仲良くしてやつてくれ。」

桐崎十色は思つたよりも小柄で肌は白い。それに何より髪が長い、だつて腰まで髪があるなんてある種、希少価値ではなかろうか。顔は髪に隠れてよく見えないものの陰鬱な表情であることはうかがえる。

「桐崎、悪いが自己紹介してもらえるか。ほら皆も自己紹介したからな。」

ただ恥ずかしいのか桐崎十色は俯いたまま。やつぱり急に自己紹介しろと言われても、まあほとんどの人間はあるんだろうな。

と考えていると

「え、ああ名前すか…。」

かなりやる気のない声で桐崎十色が言つので担任教師は

「あ、ああそうだなニックネームとかでもいいぞ。」

なんて冗談みたいなことを言つていた。

すると桐崎十色は長い黒髪をクシャクシャと一回ほどかきむしるとぼそぼそと小さく何やら呟いた。

それまで生徒の様子を見ていた担任教師は何か悪いものでも食べた
ような表情になつてわれらが担任教師は慌てて

「ああ、緊張しているのは分かるが、そうだな。趣味とか特技とか、
そういうの何かあつたら教えてくれないか。」

そんな風にとりつくろつた。

「はあそう、ですね…。わたし特技つて程でもないんですけど小さい頃オルガンやってたんですよ。まあ今は止めちゃいましたけど…。」

耳をすませてやつと聞こえる声。しかもその声は暗い。

「はあ、すみません。わたし基本、ダウナーなんですけど。まあそれなりによろしくお願ひします。」

それから、ふうと小さくため息を吐くと

「ええつと、このへんでいいですかね…。先生。」

「あ〜、うん桐崎は木崎の後ろ。窓側の一番後ろだ。」

何だか息の詰まる時間だった。

昼休みはいつもと同じ。皆は桐崎十色に何か質問なり何か行動を起こすでもなし。

いやでも最初はみんな話しかけていたものの桐崎十色が生返事しないことが次第に発見され始めてついにはほとんどの人が話しかけてこなくなつたというわけだ。

まあ結果どうやら桐崎十色は自分からなにかする、というタイプではないらしい。

そしてその桐崎十色は何故か今は俺の弁当をじつと見ている。

俺の家の弁当はやはり朝の仕込みに余つた材料か、時間がなければそのまま惣菜をつめてくることもある。

それゆえにかクラスの大半の人間が俺の弁当のおかずを食べていくのだ。

最悪の場合、惣菜盛りだくさん弁当が5分ほどで田の丸弁当に様変わりすることもあるのだ。

桐崎十色はじいと俺の弁当を見ている。

：欲しいのか？

「あの桐崎、弁当欲しいのか？」

桐崎は「くとつなずく口ロッケに箸をつけると
ぱくぱくと無言で食べ始めた。

まあ聞きたいことがあるしこれがきつかけになればいいだろう。

「なあ桐崎、お前を名前言えって言われたときなんて言つたんだ。
ん？」と口ロッケをくわえたまま振り向く桐崎。

ごりくんと握り拳の半分ほどもある口ロッケを一口で飲みこむと
ふう、とため息をつく桐崎。

「ああ血口紹介のとき、ですか…。」

言い終わると今度はエビフライを見る。

今度はエビフライか

「いいよ、食べて。」

またしても一口でエビフライを食べると

「血口紹介のときは何て言つたかでしたよね。」

「わたしの名前は勇者だって言つちゃたんですね。」

やはり暗い声。

：まあ確かに、それは先生も全力で止めるよな。

「あ、でも間違いとは言えないんですよ。」

またしても陰鬱な声。

「は？ どうこいつお前、ネットゲームとか嗜んでるわけ？」

ふう、とため息をつく桐崎。

「いえ、本当にわたしこの町じや結構有名な勇者でして。」

なんだコイツ、相当イタイ人なのか。

「あ、すみません木崎さん、でしたっけ…？あの弁当が田の丸サラ
ダ弁当になっちゃいました。」

ぼそりと桐崎に言われて弁当を見るとものぞ見事に主菜が見事に消
えた弁当があつた。

最悪だ。昼食時にもつとも恐れていた事態が起きたのであつた。

「あ、あと昨日何か変なもの見たり経験とかしてませんか?」
と、ショックに打ちひしがれている俺にぼそりと桐崎が何やら意味深な発言。

途端に頭にノイズが走る。

それを言い終わると踵を返して廊下に出る桐崎。
どうしてか、それが昨日四宮教会の近くのベンチで寝ていたこととつながっているのだと無意識に考えてしまった。

放課後、最近物騒だから寄り道して帰るなよ～。などとやる気のないメモを棒読みしたような担任教師の言葉と同時に俺は四ノ富教会に向かうこととした。

四ノ富教会には相変わらずもの見事に人がいなかつた。

俺はゆっくりと重い扉を押す。

そこには一人の女性がいた。

歳は俺より三つか四つほど上だろう。身長は160の後半。服はシスターが着るような服でなにかよくある髪を隠すような帽子がない。そしてその髪は髪は桐崎と同じくらい長い、そのへせ見惚れるほど綺麗な髪だった。

たぶん服装からしてこの教会の関係者だらう。俺よりたぶん年上のはずなにごじうじかその田は俺よつも子供みたいだつた。

「あの。」

女性からだ。

「え、はい。何でしようか？」

知らず敬語を使つてしまつ。

「ええ、何か御用があるのかと思いまして。」

そうかこの女性から見れば俺は部外者だ。

そういうえばどうしてこの場所に近寄ろうと考へたんだっけ？

いや、それよりも

「かつ勝手に入つてすみません。用事もないし帰ります。」

俺は踵を返して帰ろうとすると

「あの、もし御用がないのであれば一緒にお茶でもどうですか？」と思わぬ女性からのお誘い。

「へえ、じゃあ木崎さんはここに来たのは虫の知らせみたいなヤツですか。それにして何となくここにくるなんてすごいチョイスですね~。」

結局、一緒に教会でお茶を飲むことにした。

女性の名は市原夕と名乗つた。

お茶会を始めて数分後、市原さん自身が出したクッキー達は市原さん自身の手によって消えていった。

でもって、この人が着ている服の静かな雰囲気とは逆にひどいお喋りだと分かった。

「ふむ、木崎さん。私、思つたんですけど木崎さんはどうか昔気質なところがあると思います。」

言い終わると喉が渴いたのか水筒から紅茶を取り出す市原さん。今まで五杯目だ。

「それでですね話は変わりますけど、小さい頃木崎さんはどうだったんですか?」

：俺の小さい頃。

「俺の小さい頃、そうだな。親が一人とも忙しかったから代わりに俺の叔母が色々と世話を焼いてくれたかな。」

そう、両親は家にいなくて代わりに美奈姉さんが家事やら俺の面倒をみてくれた。

「それはすみません。私、すごく失礼なこと聞いちゃいました。」

「あ、いや寂しいと思つたことはないんだ。俺の叔母は基本的に世話上手だったし、歳も近かつたから友達みたいに接することも出来たから。」

すると市原さんはにつこりと微笑む

「そうですか、いいご家族がいらっしゃるのですね。」

「あ、でも市原さんの小さい頃って何してた?」

市原さんはどこか昔を懐かしむ表情で

「ええ、よく覚えてないんだけど私、施設に預けられてたらしいんです。」

…なんだか地雷を踏んでしまったようだ。

「あ、でも心配しないでください。私、寂しくはなかつたんです。とっても仲のいい友達がいたから寂しくはなかつたんですから。」と彼女はにこりとまた微笑んだ。

そして、スッと立ち上がると

「さて、湿っぽい話にしてしまって申し訳ありませんでした。では私の特技をお見せしましょう。」

がたがたと何やら木製の大きめの鞄のようなものを取り出す。その中からはヴァイオリンを出てきた。

「さて私の特技はヴァイオリンです、もつとも我流ですが。準備を始めた市原さんの言葉が気になる。

「我流って、どういうこと?」

すると市原さんはにこりと微笑むと

「そりや私は施設で育ちましたから。音楽なんて勉強する余裕はありませんでした、オルガンとかピアノなら知っていた先生もいたみたいで。」

さてと、と市原さんは深々と一礼すると

「さて、お聞きいたくのは『怪獣のバラード』です。木崎さんもお聞きしたことがあると思います。」

ゆっくりと『』を構える市原さん。

怪獣のバラード、その曲は知っている小学校の頃に歌つた経験があるからだ。

あの歌は確か砂漠に一人いた怪獣が人に愛されることを思つて海を目指していく歌だったような。

「どう、でした?」

にこりと微笑む市原さん。

「すごい。」

そう、すごかつた。我流とは思えなかつた。

「でも我流ですから、やっぱり本格的に勉強している方には敵いま

せん。」

「はあ、それでもすゞかつたものはすゞ」と思つ。」

あ、そういうえば今何時だつけ？

6時だ。さすがに、俺はこれ以上居続けることはよくないだらう。

「今日は楽しかつたよ、市原さん。また教会に立ち寄つてもいいかな？」

すると市原さんはにこりと微笑んで。

「ええ、また私は基本的に別の教会で働いているんです、今日はほんの気まぐれだつたんですけどね、木崎さんみたいな人が来てくれるつて分かつたのでまた気まぐれで来ようと思つます。」

俺は踵を返して教会を後にすることにした。

「あ、そういうえば木崎さん。こんな噂、知つてます？」

「ふと何でもないことのように市原さんが言つた。

「町の教会で大切なものを一つあげる代わりに願いじとが一つ叶つつていう噂。」

俺は振り向く。

そこにはにこりと笑つ市原さん。

「ああ、友達から聞いた。でも本当だつたらいいよな、願いが叶つなんて。」

何気なくそう言つていた。

市原さんは少し困を伏せると

「でも、それつて難しいと思います。自分の一番大切なものを犠牲にしてまで叶える夢つて、それは、」

初めて見た。市原さんがどこか悲しそうな顔をするのを。

辛いはずの身の上話でも悲しそうではなく昔を懐かしむよひな表情だつたのに今はすゞく悲しそうな表情だつた。

でもすぐにまた微笑んで

「あ、今のは忘れちやつて下さい。ただの妄言です。それに私が引き止めておいて言つのもどうかと思つんですけど最近は物騒ですから、寄り道せずに帰つてくださいね。」

夜の帰り道。

いつも歩きなれているはずの家までの道のり。何故か今はそれが不気味なものに感じられる。最近の事件に呼応してか辺りは住宅街なのに歩く人はいない。そのせいなのか、何故か町には人間はない。と無意識に感じてしまった。

「つて、何を考えてるんだ俺は。」

それでもどことなく今のこの町は不気味だ。

そうだ、近道でもして行こう。

すぐ近くには公園がある。そこの背後にはちょっとした森があつてそこを抜けばすぐ家に着くという仕組みになっている。俺は公園へと赴くことにした。

夜の公園というのはどことなく不気味だ。

少し鎧び付いた滑り台。

誰も座つていらないブランコが時折風に押されてキイと鎧びた音が聞こえる。

辺りは電気こそついているものの一人も家から出てきそうにない。たぶん殺人鬼が事件を起こすとしたら絶好の場所。いかん、いらない考えを起こしてしまった。家にはさつさと帰つてしまふに限る。

。

頭にノイズが走る。

昨日たしか

「つつあー。」

立ちくらみがして立つていられなくなる。

頭にノイズが入り込んでくる。

四富教会で

力なく俺は地面に倒れこむ。

俺は確かにされて

瞬間、ひゅん。と投擲物が投げつけられた音。

「ちっ、しまった。兄ちゃんが倒れこむから外しちました。」

まるで「ゴミ箱に空き缶を投げ捨てるのを失敗したかのような物言い。

そこには男が立っていた。

長身瘦躯で手足は細く、まるでその手足は蛇のよう。

右手には日本刀。

ノイズはフィルムへと変わる。

不鮮明で瞬間的な画像は映像に変わる。

そう、俺は確かにこの男に昨日殺されてー。

「ああ、あ。」

ガチガチと歯が鳴る。

男はゆっくりと日本刀を構えてゆっくりと俺に近づいてくる。

「そうか、元気になつちまつたんだな。てっきりあの傷じや死んでるかそれとも病院で寝てるかと思つてたんだがな。

さてまあ兄ちゃんには運がねえ、まあ俺も同じだがよ。だがいい経験だろ？昨日に引き続いて今日もこいつして命を狙われる経験は。」

男の声は耳に入つてこない。

「さてと兄ちゃんにはとつと消えてもらつとしますかね。そろそろ俺もペナルティが課せられそんなんでな。」

男の腕がゆっくりと上がる。

テラテラと月の光を反射する日本刀。

あ、殺される。

男の刀が何の感情もなく落ちてくる。

それが当たり前だといつもじ。

「？」

驚きは男と俺のもの。

日本刀があつさりと俺に向けて落ちてくるはずだった。

だというのに今、突然の乱入者によつてその刀は止められていた。

夜風に流れる腰まである黒髪。黒いコートを着つていて体は小柄。

「はつ、嬢ちゃん！ また会つたな！」

男は切り結んだままニタリ、と笑う。

男の攻撃を受け止め、今も男とナイフで切り結んでいるのは後姿でも分かる。

男の日本刀を受け止めていたのは桐崎十色だった。

男は桐崎と切り結ぶのをやめると

後ろに跳躍する。その距離10m。

それは昨日の焼き増しだった

俺は桐崎の表情を見る。

学校での陰鬱な雰囲気はどこへ行つたのか今の桐崎は凛とした表情で男を睨みすえる。

「嬢ちゃん、まさかコイツが生きてたのはお前の仕業か？」

男は桐崎を睨む。

「まあ、そうなりますかね。」

と桐崎も男を睨みすえたまま淡々と言つ。

「なるほど、その兄ちゃんはオレを釣るための餌つてわけか。まったく人が悪いぜ嬢ちゃんも。一思いに殺してやるつてのも人情だと思うけどな！」

言うが早いか男の体が沈む。

振るわれる腕は鞭のよう。

それは野球のアンダースローのフォームに似ていた。

ただしその手は滑空するのではなく、完全に地面についている。

石が飛んでくるのが風を切る音で分かった。

闇夜に光る火花。

それが桐崎が石を叩き落す音だと気づくのに数秒かかった。
その数秒の間に男は地面の砂利を拾う。

男の手には砂利が六個ほど。

それを男は真上に放り投げる。

砂利は真上に放り投げられた後、一斉に角度を変え桐崎を襲いつ。
翻る「一ト。

回避不可能な攻撃を桐崎は

桐崎は「一トを脱ぎ、それを盾のよつにして石の雨を防ぎきる。
それを見た男が面白そうに

「はつ！そりやどこのブランドの「一トだ！？」

男は後ろに後退しつつも石を拾い、投げる。

桐崎が簡単に追つて来れないようにだらう。
だが。

男の投げる石は「ことじ」とく桐崎に叩き落される。

なのに桐崎はナイフしか持っていないくせに男を追わない。

戦いには間合いというものが存在する。

いくら秀でた剣士でも一方的に銃で撃たれ続けければ無論、剣士は敗北する。

故に桐崎の武装はナイフが一本。つまりは剣士であり、

一方の男は桐崎との接近戦を嫌うのを見れば接近戦では桐崎に分があるということ。

つまり男は桐崎と戦う時点で石を投げることで勝利する銃である。
しかしそれでも逆が存在する。

いくら狙撃に秀でた狙撃手であろうと距離をつめられ刀で切りかかれれば勝負はつく。

故に桐崎が勝利するには距離をつめ一息のうちに切り伏せるのが定石。

男も不審に思ったのか後退をやめる。

飛び道具のない桐崎は不利だ。

なのに桐崎は笑っている。

桐崎は自分の背中に手を伸ばす。

するとそこには一振りのナイフ。

妙な形をしているナイフだ。

それは金属製の柄に鐔の部分に何かオレンジの突起がついている。

男はそれを見て

「は、二刀流か。」

それを聞いた桐崎は

右手に持ったナイフを照準を合わせる様にナイフを男に向ける。
おおよそ、格闘戦ではありえない構え、むしろあれは接近戦というよりも拳銃を構えているように見える。

桐崎はそのナイフの鐔についたオレンジ色の突起を押す。

すると

ひゅん、と何か風を切る音。

「がつあ…。」

男のうめき声。

見れば男の右腕にナイフの刃だけが刺さっていた。

「てめええ！卑怯だぞ！飛び出しナイフなんて使うなんざ…。」

痛みをこらえるためか男の喚き声は大きい。

ゆっくりと桐崎は男に近づくと

「いいじゃないすっか。別にこの戦いにルールなんて基本的にならないですから。あ、それにこのナイフはスペツナズ・ナイフって呼ばれてます。」

「くつそ、このガキ。」

桐崎の軽口にすらまともに反論できないほど男は追い詰められているといふことか。

男は忌々しげに桐崎を見る。

その様子を桐崎は冷淡に見るとたんに声色を変えて

「戯言は死んでから言え。このザ口。どうした、大道芸はもう出来

ないのか？」

すると男は

「テメエ、今度会つたらぶつ殺してやる。」

成り立たない会話。男にとつては痛みをじらえるのが精一杯なのだろ。その声はどこか擦れていた。

それを見た桐崎はやはり冷淡な声で

「次？ そんなものはないさ。ここでお前は死ぬんだからな。」

平然とあざ笑う。

桐崎はゆっくりと包丁を振りかぶる。

瞬間、男の体が黒い何かに連れ去られる。

「なー？」

これは桐崎にとつては予想外だったのだろう。

男は黒い何かに連れ去られる。

男と黒い何かが着地したのはブランコの近く。距離にして 20m。そこには蝙蝠（じゅもつ）を人のサイズまで巨大化させたような怪獣が立っていた。

それを見た桐崎は忌々しげに睨みつける。

男は怪獣を

「馬鹿が。遅いんだよ、お前は。」

すると怪獣はガラスを爪で引っかくような耳障りな声で

「すみません、ダンナ。でもまあこうやって助け出していくまし怒らないでくださいよ。」

そう言い終ると怪獣の身体がどろり、と液体のようになにその身体を変化させる。

十秒もしないうちに蝙蝠はその身体を全て溶かし終える。

そこには蝙蝠の姿はなく、ぬるりとしたスライムのようなモノに変わっていた。

どろりとスライムは身体を男に向けて身体を動かすと男の身体を包み込む。

「。。」

あまりの異常さに声も出ない。

五秒もしないうちに男は包み込まれる。

男を包み込んだスライムは纏まきのようになっていた。

そしてゆっくりと纏は闇に溶けるように消えた。

桐崎は追いつこうともせず男達の逃げていった方向を睨みつけていた。数秒間、桐崎は睨むのをやめすぐに俺の方に向き直ると

「木崎さん、少しお話があります。」

ずるずるずる。

「おー、桐崎。」

ずるずるずる。

「桐崎。」

ずるずるずるずる。

「桐崎、聞いてんのか！」

「じくん。

「あ、すみません。わたし、猫舌なもんでして。」

話があると言われて今はブランコに座っている。

話をするのに何かお茶でも買おうと自販売機にいったのだが、こいつのチヨイスはこともあろうにおしごとを選んでいた。

「悪かつたよ、急かしたりして。で話つてなんなんだ？」

すると桐崎は急に凜とした表情に戻つて

「魔王、というのを知っていますか？木崎さん。」

聞きなれない単語。

そんなのがさつきのとは関係あるように思えない。

「魔王？ゲームの話か？」

すると桐崎は

「ゲームといえるのかもしれない。ええそうですね、さつきの戦闘はそのゲーム一端です。」

桐崎はおしゃに口をつける。

「そのゲームに勝てば自分の願いを一つ叶えてもらつこと出来ま

す。」

言葉が出ない、願いを一つ叶える?

そんな話聞いたことがない。

それを察してか桐崎はふう、と溜息をつくと。

「別に信じてくれなくていいんです、勝手に話しますから。それでこのゲームには『装備』と呼ばれる、まあ有体に言えば超能力のようなものを参加者は一人一人に与えられます。

その装備を使って参加者は自分が考えうる手段を使って、他の参加者を消す。それがこの戦いの大まかな説明です。」

俺は黙つてコーヒーを飲む。

自分の願いのために他人を消す、その選択は如何なるものか。その選択を選ぶための覚悟は、

つて、ちょっと待て

「桐崎、さつきの殺し合いの話が仮に本当だとする。でもそれと『魔王』って話が繋がらない。で『魔王』とこの戦いが何の関係があるんだ?」

すると桐崎はおしるいにまた口をつけると

「そうですね。簡単に言つと参加者のあだ名です。他にあだ名がつけられているのは『魔王』もつとも二名の素性は何一つとして分かりませでしたが、そして。」

そこで言葉を切ると桐崎は

その代名詞を口にする。

いかな苦難にも屈せず、いかなる悪をも打ち砕き、弱きを助け強きを挫く。と伝えられるその名を。

「『勇者』、桐崎十色。」

「 嘸、…者？」

桐崎はおじる口を口に運ぶと

「 そりです。そのわたしを含めた二名がこの戦いの勝利者の候補です。」

なら、桐崎はこのゲームの参加者。それはつまり。

「 じゃあ、桐崎にも何か願いがあるのか。」

その言葉を聞いた桐崎は顔を伏せると、どこか辛そうに

「 ええ。あるからこそ、この戦いに挑んでいるんです。」

言い終わると桐崎はふうとため息一つ。

おじるこの入っていた缶を地面に置くと。

ひゅん。

走る銀の軌跡。

「 うわあ。」

間抜けな声と共に俺は反射的に身を翻す　いや、プランノから後ろにひっくりかえって落ちた。

俺はゆっくりと桐崎を見る。

そこにはナイフを構えた桐崎が立っていた。

その表情はさつきと同じ。

氣だるそうな顔。

「 なつ、桐崎。お前。」

俺は呆然とする。

つこつこ今まで桐崎は俺と普通に話をしてたつていうの、なんですか。

桐崎はナイフをゆっくりと俺の首に近づけていく。

そして蹲話をもするようついでにほそぼそと小さく声で

「 木崎さん、どうしてこのゲームが世間に知らされていないと思いません？」

あー。そうか、そんなこと最初に思い当たるべきだったのに。

どうして、こんなゲームがこの町で行われているのに、ゼロの二コースでも流れないその理由。

そして町で起こっている通り魔事件。

この二つがあれば何があつたかは簡単に分かる。

要は田撃者を殺してしまえばいい。

そうすれば誰にも知られることもなく、あの男みたいなヤツが他にいるとすれば死因が分からぬ死体が増えるわけだ。

俺は震える唇で精一杯強がつて言う。

「俺を口封じのために殺すのか？」

桐崎は小さく笑うと。

「『ご名答つす。正解した木崎さんには豪華黄泉の国送りツアーナイフの切つ先が首に触れる。』

「さてさつきの説明では不足がありまして、この戦いの一部始終を見た一般人は参加者は殺さなければ一定期間『装備』が使えなくなるとかのペナルティが与えられます。

つまり殺さなければわたしも損になるわけです。でも。」

桐崎は一旦、言葉を切ると

凛とした、それこそ何者にも屈しない勇者のような表情で

「わたしの仲間になれ、木崎。」

絶句する。

ついさつきまで俺の首にナイフを突きつけてきた勇者は今度は仲間にになれと言つてきた。

まったくわけが分からぬ。

「どういうつもりだ、桐崎。」

俺の言葉を聞いた桐崎は肩をくめる

「わたしは一般人は排除される、と言つたんですよ。別にわたしの仲間としていることには何の問題もありません。」

桐崎の言葉はつまり、桐崎の戦いに俺も足を踏み入れるということ。それは最悪、俺も誰かに殺されるかも知れないということ。

その死に方は桐崎にナイフで刺殺されるより酷いものになるかもし

れない。

でも、それでも必ず俺は死ぬということではない。
だからまず桐崎は俺にナイフを突きつけた。

『死ぬ覚悟はあるか?』と。

ナイフが首の皮膚に食い込む。

勇者が選択を迫る。

選ぶまでもない。

俺は。

「お前と一緒に戦う。」

そう可能性が僅かしかないにしても俺は生き残るために戦う。
それが俺の思いつく最善の選択だ。

すると桐崎は興味深そうに目を細め。

「分かりました。では、また明日。」

桐崎は踵を返して公園を去り立つとする。

「つて、待て桐崎。」

はい?と振り向く桐崎。

あ、しまった。これは気の迷いだ。

でも言つてしまつた手前後に引くことは出来ないし。

「初めてだね?。英介が女の子を家に呼ぶなんて?。あ、桐崎さん。
遠慮しないで、こっちのカツには自信があつてー。」

結局、呼び止めたはいいが何を言おうかと悩んだが俺は桐崎を夕飯
に誘うこととした。

なぜか美奈姉さんは一つ返事でこれを承諾、今に至る。

美奈姉さんは桐崎に自分の作った料理をかいがいしく桐崎の料理を
盛つしていく。

それを無言で平らげていく桐崎もビックリと思つ。

魔王はそこにいた。

目の前には廃墟その前には硬質な石碑。

「レが廃墟になつた理由が理由だけにか誰一人として石碑の前には一本の花もない。」

魔王は空を見上げる。

満天の星空の下、魔王は笑う。

「いいけそつさまでした。」

夕食開始から30分。少し大きめの食卓を覆つていたおかずの数々はそのほとんどが桐崎によつて食べつくされた。

美奈姉さんはほとんど食べれてもいいくせにニコニコしながら皿を洗つていた。

やはり料理人にとっては食べっぷりがいいのはいいことなのだろうか？

もつとも俺もほとんど食べれていないのだ。

「ねえ、英介。夜も遅いし桐崎さんを家まで送つてあげてよ。最近は物騒だしね。」

と台所から美奈姉さん。

「了解。桐崎、家まで送つていいくから行こう。」

俺は物珍しそうに美奈姉さんの皿洗いをじつと見ていた桐崎に声をかける。

「あ、はい。木崎さん何すか？」

「いや何すか、じゃなくて最近は物騒だし俺が桐崎の家まで送つてやるつていつたんだ。」

すると桐崎ははあ？と珍獣でも見るような目でそれからため息をつくと

「何言つてるんですか？」

「むう、何だその反応。俺が猿か何かみたいな目しやがつて。ふう、と桐崎はため息をつくと

「まあいいです。」

とあつさつと引き下がる。

外に出る。

町には音がない、いつもならば帰宅途中のサラリーマンを一人か二
人くらいは見かけるのに今は誰もいない。

それなのに周りの家には電気がついていて家の中が外よりも安全だ
と風景が教えてくれるよう。

「木崎さん、こっちですよ。」

「あ、すまん。考え方してた。しかしあ。」

なんというか

「桐崎の家って随分と山のほうにあるんだな。」

俺の町は山から海までの距離が極端に狭く、そのせいいか山のほうの
家になると山登りのような重労働をしなくてはならないこともある。
桐崎の家もそれにあてはまるのかどんでもない急斜面を俺たちを待
ち構えていた。

予想以上の重労働の途中、何か見覚えのある場所があつた。
古ぼけた木で作られた看板、そこには『屋境養護施設』と書いてあ
る。

たしかここは数年前、大きな火災が起きて焼失したとか。
その時は小さかつたからよく覚えていないけど、ひどい火事だつた
らしい。

たぶん見覚えがあるのは小学校のときにこの焼け跡の跡地で追悼の
ためにと何か歌つたような。

「どうしたんですか？木崎さん。」

「あ、うん。この先のさ孤児院、焼け跡は片付けたのは知ってるけ
ど、あの後どうなったんだ？」

すると桐崎は顔を伏せて

「すみません、わたし基本。家が好きなタイプなんで外のことはあ
まり。」

「うわつ、すげ。」

「うわつ、すげ。」

思わずそんなことを言つていた。

ここが坂道といつともあつてか周りに家はない。

だからなのかこの家は

美奈姉さんの店の数倍はあるうかといつとんでもなく大きい家。

日本に立つてするのが不自然な洋館。

しかも新築ではないらしく壁にはこの家の年月を現すように薦が絡み付いていてさながら絵本の中から飛び出してきた魔女の家、といつた感じだ。

「なあ、桐崎。お前つてまさか金持ちお嬢様?」

「ええ、まあ。もつともわたしは養女なんで、親が何して稼いでるかはよく知りません。」

む、なんだ。今の意味深な発言は。

俺は桐崎に質問しようとした時。

「お嬢様。」

と何か感情のない、機械みたいな声。

俺は声のほうを向く。

そこには初老の男性が立つていて
背広に蝶ネクタイ。神経質そうな角眼鏡、おそらく『執事』といつ
単語を形にしたらこんな感じになるのだろう。
それを見た桐崎は

「あ、すんません木崎さん。コイツは栗井くらい茂しげる。うちの家のめんどくさいことをやってもらつてます。」

自己紹介をされた栗井氏は恭しく頭を下げる。

「お嬢様のご学友ですね。いつもお嬢様がお世話になつております。

」

「あ、いえ。そんな。」

『お嬢様』なんていう化石化したような言葉を堂々と喋る栗井氏は本物の執事さんなのだろうか?

「栗井、木崎さんを送つてやつてくれないか。」

明らかに年上の人だ。

「かしこまりました。では木崎さん。どうぞ」ひかり。」

「のままではリムジンにでも乗せられかねない。」

さすがにそれは小市民の俺にとっては遠慮したい。

「桐崎の家を慌てて出て行く。

帰りは下り道なので楽だ。

俺は走るようにして人気のない坂を下つていく。

と屋境養護施設の看板の前。

一人の男が立っていた。

背丈は日本ではお目にかかれない二メートルほどの長身に墨のよう
な黒いコート。

天然のかくしゃりとしたクセ毛。しかも染めているのか白髪だ。
そいつは俺に近づくと

「やあ少年、こじり込に何か用かい?」

なんて軽い挨拶。

たしかに妙だ男から見ればこんな山奥に一体なんの用があるのか分
からないだろう。

「ああ俺、今さつ毛知り合いの女の子を家に送り届けてきたところ
で。」

すると男はにこりと微笑むと

「そりが、なら今度からは女の子は早く帰してあげなさい。そうだ
自己紹介がまだだったね。オレの名前は」

男の唇が二日月のようにつりあがる。

「『魔王』だ。」

「オレが魔王だ。」

俺は息を呑む。

この男が魔王？

何でこんな所に。

あー、そうか桐崎は俺が連れて帰ると画つたことにたいして呆れたのか。

しまった。桐崎はこのことを見越してー

「なんてね、冗談だ。少年、実はねオレはゲームを嗜んでてね。そこで魔王って語つてているだけさ。」

全身から気が抜ける。

なんだありきたりな話じゃないか。

「まつ、なんだ。少年、最近は危ないからね。男だからって油断しないほうがいいよ。」

魔王、と名乗つた男は踵を返しそれでは、と片手を挙げて坂道を登つっていく。

。

俺はベッドに潜り込む。

今日は本当に色々なことがあった。

俺はこれからどうなるのだろう。

また、この夢か。

焼ける建物。

吐きそうになるほど死の氣配。

それなどしてか体のほととどは落つたとしたよひて感覚がない。

「む。」

俺は体をゆっくりと起こす。

時刻は朝の6時10分。

田覚まし時計が鳴る20分前。

：一度寝をするにしても残り20分ではまともな睡眠は取れない。

「くそ、中途半端な時間に起きちまつた。」

俺は布団の中で悪態をつくと

起きて美奈姉さんの手伝いをすることにした。

階段を降りていくと

「騒がしいな。」

一階ではなにやら話し声。

俺はリビングのドアを開ける。

そこには

いつもと変らぬ朝食の風景。

そこに異物が進入していた。

異物は自然に一人分しかない朝飯をパクパクと食つている。

その異物の名を桐崎十色。

美奈姉さんはそんな異物を歓迎しているのか玉子焼きを食べさせている最中だった。

「あ、おはよう英介。」

美奈姉さんは俺に気づいたのかそんな挨拶。

「ぐつど・もーにんぐ。木崎さん。」

なんて大急ぎで玉子焼きを飲み込み返してくる異物、桐崎十色。

俺はため息をつくと

「美奈姉さん。一つ聞いていいか?」

「ん~。答えられることだったら、何でも~。」

俺は出来るだけ冷静に話すことにする

「じゃあ聞くぞ。何で桐崎が俺の家にいるんだ。」

「ええっと、それはね~。」

美奈姉さんの話を要約するといつだ。

何でも朝5時くらいに美奈姉さんが店のシャッターを開ける時に店の前で桐崎が倒れてたらしい。

話を聞けば「お腹がすいて力が出ない」とか言つたそ�で美奈姉さんは大きな丸いあんパンの頭部を持ち、顔がついた赤い服を着て、茶色いマントを羽織るヒーローのよつた良心で桐崎の朝ごはんを作つたという話である。

ちなみに後先考えなかつた救出のため俺の朝ごはんはないらしい。俺はトーストにバターを塗る。

今日の朝飯はトースト一枚である。

「うー。ごめん反省してるよ。お昼重箱にしどいたから。」

「怒つてない。それに重箱にしたら俺も食べれない。」

すると美奈姉さんは

「ならよし、桐崎さんと一緒に学校に行つてらつしゃい。」

あれ?怒つてたの俺だよな。

「木崎さん早く行きましょ。」

と玄関から桐崎の声。

つていうかお前が俺の朝飯食つたんだろうが。

桐崎と教室に入る。

するとサツカーパー部員、猪狩いかり純じゅんが驚いた顔をして出迎えてくれた。

「木崎、お今まで。彼女が出来たのか。」

呆然とした猪狩の声。

俺は机に荷物を置くととりあえず反論しようと。

「彼女じやねえ、今日たまたま一緒に朝飯食つただけだ。」

「む、そりや世間の基準では彼女つていうんだ。」

…その基準は世間ではなくお前だる。

昼休み。

俺と猪狩は中庭で昼食をとることにした。

「木崎、お前の弁当いやでかかねえか?」

・・・たしかに。

今日の俺の弁当は重箱という一人で食べるのには規格外の大きさだ。
さすがに食べきれないよなこれは。

一と。

ゆらゆらと幽霊みたいな足取りで桐崎がこつこつと歩いてくる。
いつも以上に陰鬱な表情。

「大きい弁当つすね。」

「あ～、うん。」

とりあえず返事くらいはしておく。

ふと昨日ことを思い出す。

たしか「イツ小柄な体のわりにパクパクと俺の弁当食つてたよな。
コイツならこの化け物のような弁当もあるいは。

「… なあ、猪狩。」

「なんだよ？」

「俺は配役を完全に間違えたことを感じている。」

「たしかに。だが知らんぞ、アレを解き放つたのはお前の責任だ。
よつてお前に食堂を利用するだけの金は『えん。』

「救いを求めた俺が馬鹿だつた。」

そう、桐崎は俺の弁当に手をつけたや否や、そのほととぎを食いつくしていったのだ。

お陰で俺の弁当は壊滅。結果俺が食べれたのは奈良漬だけであつた。

… 重箱弁当と桐崎。

果たしてそのどつちが化け物だったのか。

腹の虫が暴れまわる。

俺は荷物を鞄に詰め込む。

くそ。猛烈に腹が減つた。

結局電車通学ではない俺に食堂を利用できる金はなく、水道の水で
腹を膨らませて空腹をしのいでいた。

原因こと桐崎十色は午後の授業は俺の後ろでぐつすりと寝ていた。
しかもこんな日に限って掃除当番に割り当てられた。

お陰で教室には誰もいない。

「くそ、それもこれも桐崎のせいだ。」

「あの、わたしがどうかしましたか？」

突然後ろから声がする。

「うわ。」

振り返ればそこには桐崎がいた。

「うわっ。ってなんすか失礼な。」

「あー、すまん。単に背後をとられたのに驚いてるだけだ。別に他意はない。」

「そすか。」

「つていうか、何の用だ。」

「用つてほどもないすけど、これから戦い。わたしと貴方はどう行動するか方針を決めようと思いまして。」

：昨日のあれか。

「で、どうします？わたしの作戦としては、木崎さん。貴方を囮に使ってそれをわたしが叩く。そのために貴方とわたしはこれから町を歩き回る。」

「俺が囮？」

「そうつす。たぶんまだ貴方がわたしの味方になつてることは誰も知らないはずです、それに。」

「どしたよ？」「

桐崎は言葉を切ると少し顔を赤くして

「いえ、何だか同年代の男子が囮つてバトルラブコメみたいだなーつて思つて。」

「お前な、ほんとにやる気あるんだろうな。」

すると桐崎ははあ、とため息をつくと

「それは木崎さんも同じですよ。どうして昨日、一人で帰ったんですか。」

ぐ、痛いとこ突かれた。

「まあいいです。それより木崎さん、さつきの方針どうですか？」

・・・それは俺が困になる、といつ」と。

それはとてもなく危険な話だ。

でも、俺は昨日の公園で桐崎の仲間になるって決めたから。仲間を信じないヤツは仲間じやない、そいつから俺はこの危険な提案にのる。

「わかった。」

桐崎は凛とした表情に変る。

「行くぞ、木崎。」

。

いつもと変らない町。

今は夕暮れ時の四宮のオフィス街。

なのにどうしてかそれが不気味に思えてくる。

「桐崎。」

俺は隣に歩く桐崎に呼びかける。

「なんすか？」

「いや、まだ誰もかからないみたいだから。一旦ここで止めにしねえか？」

そう、さつきから俺と桐崎はこの四宮を2時間歩き回ったが成果はない。

すると桐崎はそうですね、と小さく頷く。

「で、どこかで休む場所とか考えてるんですか？」

残念だが金は持っていないからどこかのファーストフード店に行くわけにもいけないし。

休むのに適した場所は公園みたいな場所がいいな。

ここから近いのは四宮教会だ。

「すまん金持つてないから、休むのは四宮教会に行こう。」

「木崎さん。」

「何だよ。」

「計画ミスですよね。」

「…。」

「やっぱファーストフード店の方が良かつたんじゃないんですか
？あ、ついでに奢つてさー。」

「いやだ。」

結局、四富教会は開いていなかつた。
つまり今俺たちは四富教会前の前で何をするでもなくただボウと立
つていいわけであり。

と。

「あれ？木崎さんじゃないですか。」

声のしたほうを見れば市原さんが立つていた。

「誰すか？」

と桐崎。

「ああ、ここの人は市原 タ。なんでもここの管理を任せていると
か。」

ペコリ、と市原さんは律儀にお辞儀をして俺と桐崎を交互に見て俺
に耳打ちをする

「木崎さん、あちらの方はもしかして彼女さんだつたします？」
俺はきつぱりと

「いいえ、断じて違います。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8078d/>

トワイロのソラ

2010年11月2日02時43分発行